レヴィ＝ストロース予想について

――「真正性の水準」とは何か――

On Lévi-Strauss's conjecture
for Level of Authenticity in social sciences

木下　聖三

目次

1．レヴィ＝ストロース予想
2．理念型としての真正な共同体
3．類型としての真正な共同体
4．小さなペンギンとして生きる

1．レヴィ＝ストロース予想

将来おそらく、人類学から社会科学へのもっとも重要な貢献は、社会的実存の二つの様相の、この根本的な区別を導きいれた（意識しないで、ではあるが）ことにあると判断されるだろう。

（レヴィ＝ストロース『構造人類学』[1972：409]）

このクロード・レヴィ＝ストロースによる予想の意味（それ以前にまず、この予想の存在自体）は近年、小田亮によって説かれているところなのだけれども（小田「『真正性の水準』について」[2008]、小田「真正な社会の思考

としての人類学」［2010］ほか)、レヴィ＝ストロースの（あるいはレヴィ＝ストロースを読む小田の)「真正性」基準は一見（数百人か数万人かという具合に客観的で）至極単純でありながら、しかし同時に、（本物か贋物かという具合に主観的で）何とも晦渋な様相を呈しているようにも見える。

そうした印象の違いは、小田によれば、読み手の能力によるのではなく、読み手の「癖のようなもの」による。さらに言えば、住み込み調査を習わしとする人類学者たちが（意識しないで）身に付けるハビトゥスを持ち合わせているかどうかによるのである。

逆に言えば、（オリエンタリズム批判を免れ得ないような）机上の理論に親しむならば、かえって「真正性」を見取る視力が損なわれてしまうという話でもある。そういうわけで、この「予想」の第一の意味はやはり社会科学批判にあるのであろう。

そこでまず、槍玉に挙げられているのが大塚久雄の共同体観である。確かに、大塚の議論にはオリエンタリズム的な嫌いもあるのだけれども（大塚の著書『共同体の基礎理論』に寄せられた、姜尚中による解説でも、同様の指摘がなされている［2000：164-165］)、しかしながら、私は大塚による予めの釈明にも相槌を打ちたくなる。

> いま一度比喩をもっていってみれば、地図は現実の地形にもとづいて作られたのであって、現実の地形が地図に従って作られたのではない。もし両者の間にくいちがいが見出されるならば、地図の読み方が正確である限り、もちろん訂正されねばならぬのはつねに地図の方であって、地形ではないはずである。この講義で説明される基礎的諸概念や理論は、いわば諸君が史実の森に分け入ろうとするばあいに携行すべき、そのような地図にすぎない。そうした意味合いでこの講義を聞いてもらいたいと思う。
>
> （大塚『共同体の基礎理論』［2000：3］）

こういう時、レヴィ＝ストロースなら、次のように言うのではないか。

私ならもっと進んで、モデルがそのまま現実に適用できることはめったにない、と言うでしょうね。

（レヴィ＝ストロース／エリボン『遠近の回想』［2008：189］）

そうであるならば、たとえば「そのような共同体などどこにもなかった」という批判は、こと（いわば）「理念型」については、当たらないのではないだろうか。ひるがえって、以下では、理念型（ひらたくは「分析概念」）としての「真正性」（ないし「真正な共同体」）と単なる類型（ひらたくは「実体概念」）としての「真正性」（ないし「真正な共同体」）とに分けて、この「予想」の意味を解読していくことにしよう。

ここで導入した「理念型／単なる類型」という区分は、（あまり一般的ではないかもしれないが）「分析概念／実体概念」という区分、あるいは大塚に対して古島敏雄が投げかけた「（抽象的な）範疇的理解／（個別具体的な）分析的理解」という区分（大塚ほか「経済史の話題をめぐって」［1969：335ff.］）と重なる。

2．理念型としての真正な共同体

ここで、理念型としての「真正性」（ないし「真正な共同体」）を明確にイメージするために、一見異質ではあるが、「友情／信頼」という対概念を導入したい。この対概念はクリス・アンダーソンがブログ記事「なぜソーシャル・ソフトウェアは質の悪いレコメンデーションをするのか」［2005］の中で立てたものである。佐々木俊尚（『インフォコモンズ』［2008］）ついで東浩紀（『ゆるく考える』［2019：173ff.］）によれば、その対照は次の通りである。

…ぼくたちのネットに対する関係には、じつは、友情を調達するときと信頼を調達するときという、ふたつの異なった志向が混在しているわけです。そして、両者の差異は、ミクシィのような「友情」系のソーシャルメディアと、グーグルやアマゾンのような「信頼」系のデータベースサービスの差異として、アーキテクチャのデザインにもしっかり反映している。

世間では、ネットは人を「繋ぐ」ものだとおおざっぱに言います。しかしじつは、その「繋ぎかた」には大きく二種類のものがあったのです。

（東『ゆるく考える』［2019：174］）

東は続けてこうも述べている。

友情と信頼の対立。それを、固有名的で人格的で社交的なコミュニケーションと、匿名的で非人格的で「数学的」な情報交換の対立と言いかえても、さして的外れではないでしょう。

（東『ゆるく考える』［2019：175］）

両者はネットによってはじめて切り離され得た。本稿の文脈に即して言い換えれば、理念型（あるいは分析概念）に過ぎなかったはずの２種類の「繋がりかた」がネット空間において現実化（実体化）したというわけである。繰り返しになるが、この対概念は理念型に過ぎなかったはずなのだ。

そして、この対概念こそは理念型としての真正性にかかわる。友情のみを紐帯とする社会（これを理念型としての「真正な共同体」と呼んでもいいだろう）と信頼のみを紐帯とする社会。いずれも現実には存在しないのだけれども、理論的に仮想することはできるだろう。

いや、これまでにも（たとえば高温低圧下での水素が近似的に「理想」気体の性質を示すように）理想状態が発現することは、あるいはあったのかもしれない。およそ規範の通用しない「原初的世界」を問題化した荻野昌弘は次のように述べる。

零度の社会性の位相では、ある行為が詐欺であるのか、あるいは贈与であるのかはわからない。そもそもこの位相では、行為が道徳的であるか否かは問題ではない。ただし、この位相においてもある種の秩序は存在している。行為を可能にし、滞りなく遂行させるための場はある。そのなかで、相手との波長を同調させることだけが問題となるの

である。

（荻野『零度の社会』［2005：51-52］）

交換が成立しない世界、言い換えれば、信頼性のかけらもない世界、そして、相手との波長を同調させることだけが問題となる世界はまさに「友情のみを紐帯とする社会」であり、すなわち理念型としての「真正な共同体」だろう。

ここで言う「友情」は恋愛や性愛を捨象しない広い概念としてとらえるべきである。たとえばアンソニー・ギデンズの言う「純粋な関係性」は恋愛や性愛に焦点を当てた概念である（ギデンズ『親密性の変容』［1995］参照）。しかし、たとえばミシェル・フーコーのように、友情か恋愛かを問わずに、いっそうの一般化を推し進めるならば（フーコー「生の様式としての友愛について」『思考集成Ⅷ』［2001：371-378］など参照）、それは「連帯」という概念に昇華するのではないか。さすれば、「友情／信頼」という（いわば通俗的な）対概念は、重田園江によって整理された「連帯／分業」という（より専門的な）それと重なるだろう（重田「連帯の哲学」［2007］参照）。

3．類型としての真正な共同体

「友情」系のソーシャルメディアと「信頼」系のデータベースサービスについて、東は次のように続けている。

…佐々木氏は、友情と信頼の切断こそがいま人々が感じている不安の源泉であり、したがって次世代のサービスは両者の両立に進むだろう、と説いています。

しかし、ぼくには逆に、友情と信頼を切り離すことができる、むしろそれこそがネットの、というか二十一世紀の新しい社会的インフラの可能性のように思えてなりません。

（東『ゆるく考える』［2019：176-177］）

かつては渾然としていた友情を紐帯とする社会と信頼を紐帯とする社会と

が今や切り離されつつある。それが危機か好機かという評価をおけば、両人の現状認識は一致していよう。

友情と信頼とが渾然とした社会から友情と信頼とが切り離された社会へ。この段階論を共有するならば、前者を実在した真正な共同体（すなわち「実体概念としての真正な共同体」に相当しよう）と見なすことができよう。小田が（真正な共同体と非真正な社会とがただいまも同時並存するという）「二重社会」論を説くのも、いまや友情と信頼とが（理念型としての真正な共同体とやはり理念型としての非真正な社会とが）切り離されているという認識にもとづいている（小田「『二重社会』という視点とネオリベラリズム」［2009］参照）。

真正な共同体を志向する議論が、かつて実在した（友情と信頼とが渾然とした）共同体へのノスタルジーであったり、また、理念型としての（友情のみを紐帯とする）真正な共同体を希求するロマンチシズムだととらえられるのも故なきことではない。しかし、そうした印象にとらわれずに、まずは理念型としてのそれと単なる類型としてのそれを区別することからはじめるべきだろう。そうしてこそ、何の価値判断も含まない（自然科学上の）「理想気体」概念と同じような、何ら価値判断を含まない（社会科学上の）「理想状態」を定置することができようし、ひいては人類学が社会科学の科学性を担保するようなフレームを提供する可能性も開けるのだろう。

4．小さなペンギンとして生きる

友情と信頼とが渾然とした社会から友情と信頼とが切り離された社会へ。この広く共有されている段階論を、いまや近代化の定義とすることすらできるだろう。問題は、どちらかと言えば、この変化をいかに評価するかにある。

ヨハイ・ベンクラーが描いた「〔リナックスのシンボルである〕ペンギンvs〔国家の別名としての〕リヴァイアサン」という構図に対して（ベンクラー『協力がつくる社会』［2013］）、ブルース・シュナイアーは、他人の思惑など考えずに済ませられる仕組みこそが文明社会なのだと説いている（シュナイ

アー『信頼と裏切りの社会』[2013])。

友情と信頼の切断を危機と評価する佐々木と、好機と評価する東の違いも、ベンクラーとシュナイアーの社会観の違いに帰着させられるように思う。「〔残すべきものと残すべからざるものを区別する〕その研究もやらないで、いきなり古い伝統的共同体を残せなどというのは社会科学者としてはおかしい」と述べる大塚は（大塚ほか「社会科学の創造」[1983：388]）間違いなく、シュナイアーに与する近代主義者だろう。

では、レヴィ＝ストロースはどう言うのだろう。あくまでも（いわばペンギンとして）友情と信頼を結び合せよと言うのか。あるいは、そうではなく、友情と信頼とが切り離される最中にあって、なおも（いわば小さなペンギンとして）友情を紡ぎ続けよと言うのか。

実際のレヴィ＝ストロースは「それ〔社会改革〕は民族学者の役割ではありません」、「ことの成行きから、民族学者は自分を、社会学的哲学的な、巨大な経験の無力な保管者であると思っています」と述べている（ジョルジュ・シャルボニエ『レヴィ＝ストロースとの対話』[1970：58]、強調は木下による）。つまり、冒頭の「予想」も、少なくとも第一義的には「人類学から社会科学への貢献」に限った話なのであって、広く「人類学から社会への貢献」を謳ったものではないのだろう。

しかし、私たちは同時に、レヴィ＝ストロースが（「不正を正すことへの、抑圧された者の希望の星たらんとすることへの偏執狂的情熱」たる）「ドン・キホーテ的精神」の持ち主であったことも忘れてはならないだろう（レヴィ＝ストロース／エリボン『遠近の回想』[2008：176, 366] 参照）。

東は別の著書で、マーク・グラノヴェターの「弱い絆」論を偶然の関係か必然の関係かに読み換えながら、「親子関係は『弱い絆』の最たるものだ」と結論づけている（東『弱いつながり』[2014：138ff.]）。これは精確には「子との関係は」だろう。というのも、東は親にとって子の存在がいかに偶然の産物かを説くのだが、子にとって親が親であるのはむしろ必然であろうからである（親は子によってはじめて親になるのに対して、子ははじめから子であるという意味において）。

これは、紐帯についての認識が当事者間においてすらずれるという話であり、また、ずらすことができるという話でもある。

荻野が著書冒頭［2005：2,19］で、近松門左衛門の『曽根崎心中』を引いている。この物語は「徳兵衛が（恋愛を含む）友情の紐帯を取り続けた結果、ついには信頼の紐帯によって殺される」話として観ることもできるだろう。じっさい、徳兵衛の選択こそが観衆の心をつかみ続けているのだろう。

（贈与か詐欺かが不分明な共同体における）贈与は（信頼性の支配する社会の中で）容易に詐欺に取って換えられる。（理念型としての）真正な共同体は死ぬ気になってようやく確保できるかもしれない（そのためにほんとうに死んでしまうかもしれない）、じつに儚いものだ。されどじっさい誰も死にたくなどない。人々が死ぬ危険性を減じ続けたとき、信頼のみを紐帯とする社会が出来するのだろう。

「真正性の水準」はそのようなアンビヴァレントな条件の下で、人々がいわば小さなペンギンとして生きる、ほのかな可能性を（あるいは不可能性を）照らすための概念装置なのである。

付記

小田亮先生には、先生が成城大学に赴任されて以来、長く指導していただいた。先生はその後、首都大学東京に転任され、今年、同校を定年退職される。この機に長年のご教授に対する感謝の意を表すべく、（自分の誤解曲解を晒す危険を顧みず）この場に受講ノートを掲げる次第である。

参照文献

東浩紀

2014『弱いつながり　検索ワードを探す旅』幻冬社

2019『ゆるく考える』河出書房新社

アンダーソン（Chris Anderson）

2005 Why Social Software Makes for Poor Recommendations, The Long Tail（weblog）, https://longtail.typepad.com/the_long_tail/2005/02/why_social_netw.html（最終アクセス日 2020 年 1 月 18 日）

大塚久雄

2000『共同体の基礎理論』（姜尚中解説）岩波現代文庫

大塚久雄ほか

1969「経済史の話題をめぐって」『大塚久雄著作集　第 7 巻』岩波書店

1986「社会科学の創造」『大塚久雄著作集　第13巻』岩波書店
荻野昌弘
2005『零度の社会　詐欺と贈与の社会学』世界思想社
小田亮
2008「『真正性の水準』について」『思想』1016
2009「『二重社会』という視点とネオリベラリズム　生存のための日常的実践」『文化人類学』74-2
2010「真正な社会の思考としての人類学」『kawade 道の手帖レヴィ＝ストロース』河出書房新社
重田園江
2007「連帯の哲学」『現代思想』35-11
ギデンズ（Anthony Giddens）
1995『親密性の変容』（松尾精文／松川昭子訳）而立書房
佐々木俊尚
2008『インフォコモンズ』講談社 BIZ
シャルボニエ（Georges Charbonnier）
1970『レヴィ＝ストロースとの対話』（多田智満子訳）みすず書房
シュナイアー（Bruce Schneier）
2013『信頼と裏切りの社会』（山形浩生訳）NTT 出版
フーコー（Michel Foucault）
2001『ミシェル・フーコー　思考集成Ⅷ　政治／友愛』（増田一夫ほか訳）筑摩書房
ベンクラー（Yochai Benkler）
2013『協力がつくる社会　ペンギンとリヴァイアサン』（山形浩生訳）NTT 出版
レヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss）
1972『構造人類学』（川田順造ほか訳）みすず書房
レヴィ＝ストロース／エリボン（Claude Lévi-Strauss/Didier Eribon）
2008『遠近の回想 増補新版』（竹内信夫訳）みすず書房